

「作家さん」と生活者運動

——主婦のハンドメイド集団を事例として——

九州大学比較社会文化学府博士後期課程 里村和歌子

1 目的

この報告の目的は、ハンドメイド作品を制作し自ら販売する主婦たちの集団「作家さん」の活動が、1970年代に定着した生活者運動に連なるかどうかを確認することである。2000年以降のナチュラル系ブームによって出現した「作家さん」は、生産手段を所有しながら自らの調整下で生産労働を行う点で労働者ではなく、家庭領域に生産労働が漏出している。つまり、労働と生活とをつないでいるともいえる彼女たちの労働的行為は、生活者運動が行動原理としてきた既存の秩序に対抗する明確な視点を持ちうるかどうか、そして主婦性を乗り越えることができるのかどうか。以上の2点について生活者運動の議論を参照しながら探る。

2 方法

そこで、福岡県内で活動する「作家さん」のフィールド調査で得たデータを用いる。第一期は2012年9月から11月、第二期は2013年10月から2014年3月まで、福岡県内のショッピングモール、護国神社、宗像ユリックス、門司港レトロの各イベント会場でフィールドワークを行った。まず第一期に「作家さん」19人（うち男性3人）、客10人への半構造化インタビューの他、客の呼び込み、レジ管理、荷出し、荷入れなどを手伝いながら「作家さん」の参与観察をした。さらに第二期では学歴や年収、配偶者の職業や世帯年収に踏み込んだライフストーリーインタビューを6人の「作家さん」に行った。それらを違和感なく可能にしたのは「作家さん」のほとんどが筆者と同世代の主婦であったためである。

3 結果

分析の結果、被調査者である「作家さん」は、収入を得るために、パート労働の代替として作家業を選んだと説明していることがわかった。つまり、ほとんどが主婦である彼女たちにとって、ケア労働と市場での労働との折り合いをつけることは容易ではないが、作家業はその両立を可能にしているともいえる。そしてそのプロセスにおいてハンドメイド仲間が増え、ネットワークが広がり、信頼が醸成され、お互い承認し合う居心地のいい関係を形成している。以上のような彼女たちの姿は、生活者運動の担い手の圧倒的多数である高学歴中産階級の活動的な主婦たちとは異なっている。第二期の調査において全員が中高卒であったことが示すように、「作家さん」は声高に個人の生き方や、生産や消費のあり方、環境問題、政治のあり方を問題にしているわけではない。むしろ、子育てをしながら収入を得たいというプラグマティックな欲求が、労働と生活のオルタナティブなあり方を偶発的に導いているともいえる。

4 結論

以上から、「作家さん」は生活者運動の担い手とは階層においても志向性においても異なることがわかった。新しい社会運動の特徴である脱物質的価値への転換を唱えるわけでもなく、対象、目標、達成の手段をもっているわけでもない。しかし、彼女たちがまとうリネン、木のぬくもりや陶器、そもそも手づくりという行為それ自体が、資本主義へのアンチテーゼから生まれたナチュラル系が提唱する行為でもあった。そう考えれば、物質主義的価値への反省を含む生活者運動と、「作家さん」のいる位置とがそれほど遠くないと考えられる。しかしそれは同時に「主婦だからこそ実現する運動だ」という生活者運動が浴びつづけてきた批判を、どう捉え乗り越えていくかという課題にもつながっていく。

文献

佐藤慶幸・天野正子・那須壽, 1995, 『女性たちの生活者運動 ——生活クラブを支える人びと』 マルジュ社。